「 さ さ え 」

2009年10月発行　情報誌　第29号
発行　NPO福祉用具ネット事務局
住所：福岡県田川市伊田4395（福岡県立大学付属研究所　生涯福祉研究センター内）
TEL／FAX：　0947－42－2286
E－mail　　npo-fukusiyougunet@sage.ocn.ne.jp
HP　　http://www10.ocn.ne.jp/~npofynet/enter.htm
情報誌「ささえ」は年4回（1月・4月・7月・10月）発行しています。
印刷　よしみ工産（株）　北九州市戸畑区天神1丁目13－5

福祉用具はあなたの自立をささえます

あなたのささえがＮＰＯ福祉用具ネットを元気にします

床ずれ防止ハイブリッドエアマット「ピーウェーブ」

P-Wave

介護保険貸与対象商品
本製品は福岡県産炭地域振興センターの助成を受けて産学官で共同開発した商品です。

特長
床ずれが一番発生しやすい腰周り部分だけが膨縮するエアマットタイプ。
部分的なエアマットなので浮遊感が少なく寝心地がとてもよい。

特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育んでいきたい・・」

コミュニケーションはドイツ語

ＮＰＯ福祉用具ネット理事長　豊田　謙二（熊本学園大学教授）

子どもはかわいい。天使のように何の屈託もなく、天心爛漫に笑顔がはじける。だから、その体のすべてからわたしたちは力をもらう。さて、私の時計の針をずっと過去に戻してみたい。私の 30 歳代の初め、名古屋大学の博士課程に在籍していたときに、ドイツのフライブルク大学に1年間留学した。99 歳のおばあさん、大学教授の夫を亡くした 50 歳代の女性と女子大生の娘、そして毎日出勤のホームヘルパーはギリシャの少女、これがすべての登場人物であるが、その館の2室を間借りした私の周りはすべて女性であった。

少し認知症を抱えているおばあさんは、大きな音のするブザーを深夜にならす。その屋敷は 1900 年代の初めに建築されたもので、3階建ての洋館である。優雅な壁面の装飾、贅沢なバルコニーの広さ、館の回りは緑で埋め尽くされ、リスが木々の間を飛び跳ねる、まるで中世のお城なのである。深夜の大きなブザーに促された私は、立派な1室に横たわるおばあさんのベッドに近づく。「おまえはだれだ」「わたしは日本の留学生です」。その問答は毎夜の日課であった。なぜか、いつも未亡人も女子学生もいなかったのである。

おばあさんは「ベッカーさんを呼べ」という。この深夜に、と思うがそれ以外の術もない。下の階の玄関ブザーをおそるおそる鳴らして「おばあさんがお呼びです」、と来訪をお願いする。「いいですよ」という奥さんの応答。しばしのおばあさんとベッカーさんとの会話、そして再び深夜の闇に包まれる。それも毎夜の日課。

館の美しい未亡人は私を見つけると「ピンポン」と呼びかける。玄関の間にピンポン台が置かれ、ラケットも常備されている。私は野球なら少しはましだが、ピンポンのような小さな玉のコントロールは苦手、それでも間借り人のつらさでお付き合い。未亡人はオードリー・ヘップバーンの映画がお好きで、ある日は「シャレード」を一人で鑑賞中であった。私はと言えば、急ぎの相談があった。ノックして相談がありますと告げると即座にテレビのスイッチをサッと切られた。そして「どうぞ」、と私に向き合ったのである。私の目にはその「構え」がいまでも鮮明に焼き付いている。

別の日、娘さんが「ムティー」、とおかあさんに相談を持ちかける場面に出くわした。未亡人はこの時も見ていたテレビを切って娘に対していた。私の時にテレビを切ったのは、外国人へのもてなしではなかったとその時に了解。それは人と人とが話をする時の基本のマナーであった。わが国ではテレビをみながら、親子の「会話が足りない」という報道にうなずきながら、だからといってテレビは切らないのである。

私は「コミュニケーション」というカタカナに触れるとき、ドイツでのあの痛切な体験を思い起こすのである。「コミュニケーション」、とは少し難しく言えば、シンボル（＝言葉）による人と人との相互行為であるが、まずは目を見つめ心を開いて話を聞く、どう聞くか、という一対一の真剣勝負にその基本がある、と私には思われる。わざわざそういう議論を持ち出すのも、親と子、子どもと子どもの会話が成立しないからであり、ますます携帯などの通信機器を介しての間接的な会話が拡大しているからである。

人と人との理解は完全にはできないにしても、あなたは私には必要なひと、大切な人、というメッセージを送ることは生きる人には欠かせないものであり、見つめ合いのなかで届けたいものである。

足と靴の相談室(シリーズ４)
～正しい靴の履き方～

福岡県立大学附属研究所生涯福祉研究センター　助手　中藤広美
（ＮＰＯ福祉用具ネット理事）

2004年9月に福岡県立大学福祉用具研究会のテーマで、「足と靴」の事を取り上げて5年の月日がたちました。今では、あらたに生涯福祉研究センターの調査･研究プロジェクトとして「「足と靴」の問題性と福祉拡充に関する総合的研究（代表　神谷英二　福岡県立大学准教授）」が立ち上がり、生涯福祉研究センター内に「足と靴の相談室」、そして大牟田市にある NPO 福祉でまちがよみがえる会が立ち上げた「足と靴の相談室　ぐーぱ」が開設されました。そしてもうじき大牟田市でインソール工場が立ち上がる予定です。この間、私は街ゆく人たちの靴を履いた歩き方、靴の履き方が気になり注意してみてきました。5年の間で正しい靴の履き方の一つ、「靴を脱ぐときは毎回紐をほどく」人と何人出会えたでしょうか。実は、5 人もいません。日本の家屋事情からどうしても、面倒になってしまっているのが現状なのかもしれません。

では、数少ないとはいえキチンと紐をほどいた人は「なぜ紐をほどいたのか」知りたくてたまりませんでした。初対面であるにもかかわらず声をかけずにはおれなくて、「失礼ですが、なぜ紐をほどいたのですか？」と質問してみました。

A さん（初老の男性）

「履くたびに、キチンと紐を締めた方がとても歩きやすいのですよ。いつからでしょうねぇ。毎回紐をしめないと歩けなくなりました。」

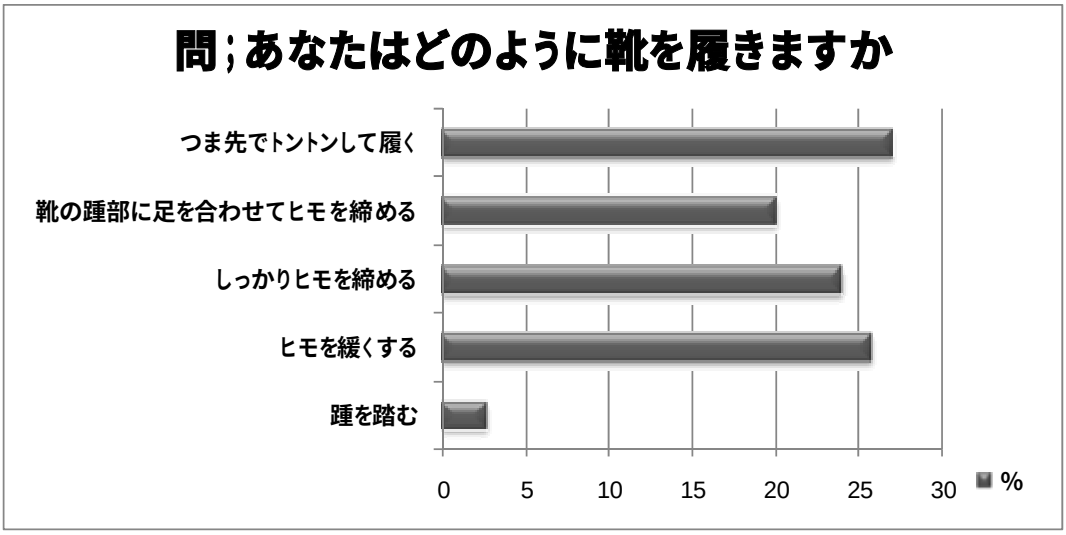
B さん（30 歳前後の素敵な男性）

「ん～･･･　わかりません。子どもの頃からですからぁ･･･」

皆さんは靴を履くとき、どのようにして履きますか？大半の方は下のいずれかの履き方をしていると思います。

- ✧　靴に足を入れたら、つま先を立てて「トントン」と地面を蹴って足を納める。
- ✧　靴の踵部分に踵をフィットさせて履く。ヒモ靴の場合、そのまま紐を締める。
- ✧　しっかりヒモを締めて履く。
- ✧　脱ぎ履きの為にヒモを緩くしておく。
- ✧　踵を踏んで履く。

次のグラフは平成 21 年度筑豊市民大学の「足と靴のゼミ」の皆さんと一緒にアンケート調査をした結果の一つです（男女 212 人　内訳　男；34 人、女；178 人）。他にも履き方はあるでしょうが、いかがでしょう。



今回は「正しい靴の履き方」についてお話をします。前回お伝えした「歩くための正しい靴」を選んでも、その履き方が正しくなければせっかくの靴の機能が十分に生かされません。さらには、正しくない履き方をしていたがために、足にトラブルが発生している方も少なくありません。「え？いままで正しい履き方なんて考えてもいなかった！」という方、これを機会に「正しい靴の履き方」を生活に取り入れてみてください。きっと、「あれ？歩きやすい。」と感じられると思います。

靴を脱ぐときは毎回紐をほどく

結んだまま脱ぎ履きすると、履き口が伸びてしまい靴のサポート力が無くなってしまいます。また、踵を圧迫してしまうため、踵がつぶれせっかくのサポート力が低下します。

靴ベラをつかう

こうすることによって、大切な踵部（ヒールカウンター）を守ることができますし、靴が履きやすくなります。携帯用の靴ベラをポケットやバッグにいれて持ち回る事をお勧めします。

踵をたてて靴の後に足をフィットさせ紐をしっかりしめる

こうすることによって、足が足首でしっかりと固定されて靴の中でずれることがないため、巻づめになったり、タコやウオノ目などのその他のトラブルを避けることができます。

（イラスト　小野由可里　福岡県立大学人間社会学部４年）

細かくいえばもう少しあるのですが、ひとまずこれらを実践してみませんか？なんだか足が疲れる。すぐに靴が悪くなるという方も、効果が出てくるかもしれませんよ。実際にやってみたいかたは、「足と靴の相談室」0947-42-2119　中藤までご相談ください。（つづく）

心ひかれた福祉用具≪マイチョイス≫　（シリーズ 9）

NPO 福祉用具ネット会員（理学療法士）　井内　陽三

身体に合った車いすを手に入れた女性のその後

前回の話の続きです。今回は、前回お話した劇的ビフォー･アフターの続きと、そのまた後の話。
新たな車いすの調整を受け、快適な姿勢を手に入れた A さん。様々な隠された力が見られるように。

1．車いす調整直後の試み

「もしかして･･･」（パート1）

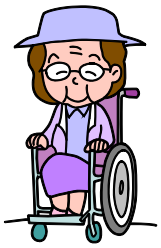
しっかり立てずに、おしりが十分に上がらない状態でしたが、手すりを外し、車いすへの横移乗を誘導。なんと、今まで職員介助がかなり必要とされていた A さん、わずかな介助で乗り移りが可能なことが判明。

「もしかして･･･」（パート2）

標準型車いすに乗って押してもらうのが多かった A さん。「足がよく動いてるなあ～」と思い、足こぎを少し行ってもらう。要領がわかった後は、廊下手すりを伝い、わずかな距離であるが、見守り移動可能なことを発見。

2．数ヵ月後

A さんは他の施設に移動。車いすの調整確認に行きました。そこでは、以前からは想像できない、顔を前に上げた A さんが待っていました。姿勢もさらに良くなり、再度車いすの調整。笑顔でいっぱいお話ができる A さんがそこにいました。



3．さらにその後

「A さんのご主人が亡くなった」と、NPO に連絡がありました。さぞかし、気を落としているだろうと思われました。しかし、もうひとつ、別のお話も。

「A さん、お葬式の際は、車いすに座って、しっかりと喪主を務められたそうですよ」と。

4．施設での生活

再度、施設を訪れる機会があり、クッションの再調整を行いました。しかし、そこで、びっくりする光景を目の当たりにしました。

「立って、うごいてる！」

元気になった姿を見て、施設のケアマネージャーがすかさず、運動につなげていてくれていたのでした。ベッドから車いすに移る数歩。

どんなに長いか、短いか。

でも、しっかりした足取りです。

お昼の知らせがあり、食堂に移動することに。

廊下まで一緒にでると、不意に手を離す職員の方。

「？？？（こんなところに置き去り）」

「さあどうぞ」（職員の声）

長い廊下の先を目指して、手と足でゆっくり移動していく A さんをみんなで見送ったのでした。

今、思うこと。「福祉用具の開発に王道なし」

（その 20）

九州日立マクセル㈱ 開発本部長　坂田 栄二
（NPO福祉用具ネット理事）

ちゃんと計れた体重計

松原が試作した車いす体重計の第一号機に、佐賀大学の松尾先生が移乗した。

「おっ！ちゃんと計れるじゃないか。私の体重はこんなにあるのか！こりゃ良い。でも、座面がぐらぐらするね･･･」

計れることの驚きと、ぐらつくことの不安が入り混じった感想だった。

「はい、今それを対策しているんですよ。」

松原は、自信有り気に答えた。

「でも高くなっちゃダメだよ。高いと手が出せないからね。皆に使ってもらえないと意味がないからね。」

「ええ、そう思って、体重計の部分は、ホームセンターで売っているレベルの安いものが使えないかと試作したのよね。私、あちこちのお店を探して、安くて一番使いやすい形のものを探したんですよ。」

大山の説明を聞きながら、松尾先生は自分の車いすに座りなおした。

「安心したよ。これでお客にも説明できるな。」

そう言い残して、帰っていった。

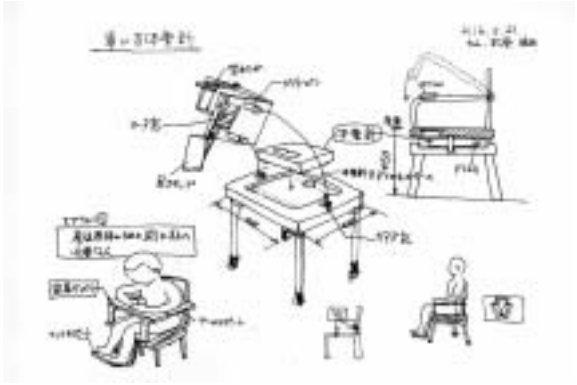
本当に計れたんだという安堵感が皆に流れた。これまで健常者達ばかりで試していた車いす体重計が、車いす利用者でも、ちゃんと移乗できるし、ちゃんと計れたことを一番喜んだのは松原だったのかもしれない。

しかし先生からの課題は残った。早急に解決しないといけない。

対策会議

それからひと月が過ぎた。

皆が集まって、対策会議のまとめが行われていた。



ひと月前の図面と変わっているところがあちこちあった。

これで構想図は固まった。次は本格的な試作品作りだ。

坂田は、Web（インターネット）で作ってくれそうな会社を検索してリストを作った。

その中で眼に止まったのが、大阪のはずれにある体重計メーカーだった。自社ブランドの販売はしておらず、販売先には大手家電メーカーの名前がずらりと並んでいた。相手先ブランド（商標）を専門に作る会社だ。この会社なら間違いない。色んな経験を積んでいるだろうし、たくさんの家電メーカーと付き合っているから、秘密もしっかり守る社内体制もあるだろう。きっと、いい物を作ってくれるはずだ。

いきなり訪問する効能とは・・・

夏真盛りのある日、彼は大阪まで出向いていった。予め電話で訪問の約束もせずにいきなり行くのが彼流である。

電話で予約していくと相手は身構えて、いい所ばかりを見せようとする。これでは本当の実力がわからない。

工場の場所も判らない彼は、額を伝い流れる汗を拭きながら番地を頼りに30分ほど歩いた。

前方に工業団地が見えてきた。工業団地の入り口には、必ず配置図がある。どの会社がどこにあるかすぐにわかるので彼はまずこれを探す。

この配置図を見つけた彼は、唖然とした。目指す会社は丘の最も高い場所にあった。工業団地だから、あまりにも広すぎて、工場は見えているのになかなかたどり着かない。

坂道を上り詰めたところにある会社に、ようやくたどり着いた。しかしすぐには玄関に入らない。

まず会社の周りを 1 周して、写真を撮る。ゴミが散らかっていないか、駐車場はきちんと車が並んでいるか、掲示物は、日にちが経ちすぎていないかなど見るところはたくさんある。特に工場の裏側のチェックが大事である。これは家庭でも同じであろう。

このチェックは、会社の考え方、社員のモラルなど沢山のことがわかる。ちなみにこの会社は程度の良い方だった。

しかしまだ彼は門をくぐらない。しばらく遠くから、出入りする人や車も見る。特に車の側面に書かれている会社名は写真に取る。その会社にとってのお客さんや部品を納める業者さんの名前がわかる。しかも、出入りする車の台数を見ると元気度がわかる。

1 時間ほどタバコをすいながらチェックをした彼は、チェック結果に満足したのかどうかは判らないが、携帯電話を取り出すとこの会社に電話を掛けた。

次のチェックは、電話の対応力だ。電話を取ったのは女性だった。事情を説明すると、

「今日は営業担当が出払っているので、技術の者ならお話を聞けますが･･･」

との対応だった。これは都合が良い。技術者ならこちらが

困っていることを色々相談できるから。そう思った彼は
「営業の人がいないのは残念ですが･･･今、門の前にいるんです。･･･せっかく来たのだから、技術者の方に是非取り次いでもらえませんか。」
　彼は困ったような口ぶりでゆっくりと話ながら、これは狙い通りになったと喜んだ。ようやく彼は、門をくぐった。

こんなもの出来ますか？

　通された応接間で周りを見渡した。壁際の棚に各社の商品のサンプルが並んでいる。その中には“こんなものも出来るのか！”と驚きの商品があった。こんな商品ができるのなら、この会社で車いす用は簡単だろうと思った。
　「コッコッ！」 とドアがノックされて、男性が入ってきた。ちょっとやせ気味の、いかにも技術者らしい汚れた服装である。
　名刺を交換すると、その技術者は会社案内を説明し始めた。坂田は既に調査済みだったが、相槌を打っていた。一通り説明が終わると、坂田はそれを待っていたかのように「ＮＰＯ福祉用具ネット」の説明を始めた。
　聞いていた技術者は、ＮＰＯの運営資金をどうやって捻出しているのか盛んに質問をしてきた。多分、試作代が払ってもらえないのではないかと不安になったためだろう。そのように察した坂田は、
「開発資金は、県の助成金を受けていますので大丈夫ですよ。」
　と答えた。
　技術者は、納得したのか、
「ご依頼の内容が出来るのかどうかわかりませんが、お聞かせ願えませんか？」
　と前向きな反応をした。
　坂田は、先日の議事録のコピーを広げ、体重計の構想を説明した。
　技術者は硬い顔をくずして、緊張が解けた様子で話し始めた。
「これまでにも何社からか、お話がありました。でもここまで煮詰めてこられた会社は有りませんね。しかしいくつか問題がありますよ。・・・・」
　彼は、技術的問題を次々と挙げ始めた。
　まず、最初に指摘したのが、体重計の取付け位置が腰のすぐ下にあるとぐらついて計れないことだった。指摘の通りである。これまでの試作品は、大山や松尾先生も指摘したとおり、座面がぐらつくと正確な値が出ない。これは経験済みだったので坂田は納得したが、その技術者は試作品を見たこともないのに、問題点を指摘した。坂田は、この技術者はしっかりしているぞと喜んだ。
「この場合はですね・・・体重計を床に近い位置に置くほうがいいんですよ。ベース部分に入れるとぐらついても安定して計れますよ。」
　彼は、その解決策まで教えてくれた。
「もう１つの問題は、このタイプの体重計は、計量法の検定を受けないと売れませんよ。病院のカルテなどに体重を記入するには検定を受けたものを使用しないとダメなんですよ。」
　計量法があることは知っていたが、検定を受けてないと買ってもらえないとは思っても見なかったことである。しかも家庭用と業務用では、検定レベルが違うという。坂田にとっては新しい問題である。
　色々教えてもらった坂田は、
「もう一度、検討してみますので出来上がりましたらまた、相談に乗ってください。」と念を押してその会社を後にした。

検定無しで行こう！

　九州に戻った坂田は関係者を集めて、検定を取るか無しで行くかの相談をした。
　全員の意見は、出来るだけ安く作り、毎日の変化がわかるレベルでいいじゃないかとの結論に達した。
　もう 1 つの問題点は、体重計の組込み位置を最も低いベース部分にすることで決着した。
　よし！これでいけるぞ！！みんなの意見がまとまったところでデザインをどうするかの話になった。
　イスのデザインを経験したものは少ない。そこで社外デザイナーに依頼することにした。

　デザイナーは車いすや事務机・イスなどを手がけている。背もたれの形や座面形状など良く知っているようであった。彼にＮＰＯの思いを伝えて出来上がったのがこのイラストである。いかにもシンプルで座りやすそうである。皆はなんとなく出来上がったような気持ちになった。　　（つづく）

事務局からのお知らせ

■ **11月27日～29日までの3日間、西日本国際福祉機器展が開催されます。NPO福祉用具ネットも開発支援をしている企業や別府リハビリテーションセンターと協力して出展します。**

11月に毎年開催されている第11回西日本国際福祉機器展に今年も出展できることになりました。

NPO福祉用具ネットのブースには、共同開発品や開発に協力をした企業に協力を依頼しました。

出展品は以下の通り。

★ 九州日立マクセル㈱：床ずれ防止ハイブリッドエアマットP・Wave・専用ボックスシーツ・試作品「圧切替型車いす用クッションP・WaveMini」
★ ユニ・チャーム ヒューマンケア㈱：尿吸引ロボヒューマニー ㈱特殊尿器㈱
★ 木原鉄工所／ロボフューチャー㈱：試作品 義手用ロボットハンド
★ 龍宮㈱：パシーマ製品
★ 福祉SDグループ：洗髪シャワー・介護シャワー
★ 福岡県立大学福祉用具研究会：活動紹介パネル
★ 社会福祉法人農協共済別府リハビリテーションセンター：介護相談コーナー・ミニセミナー共同開催

ブース内でミニセミナーを開催！

◆27日金曜日
10時30分から11時30分【リフトの選び方・使い方】
13時から14時【高次脳機能障がい～症状とその対応～】
14時15分から15時15分【トランスファーボード・シートの使い方】
15時30分から16時30分【床ずれ防止用具の選び方】
◆28日土曜日
10時30分から11時30分【トランスファーボード・シートの使い方】
13時から14時【脳卒中後の在宅生活の工夫～家庭でできるエクササイズ～】
14時15分から15時15分【リフトの選び方・使い方】
15時30分から16時30分【脳卒中後の在宅生活の工夫～家庭でできる摂食・嚥下訓練～】
◆29日日曜日
10時30分から11時30分【リフトの選び方・使い方】
13時から14時【脳卒中後の在宅生活の工夫～家庭でできる摂食・嚥下訓練～】
14時15分から15時15分【トランスファーボード・シートの使い方】
15時30分から16時30分【脳卒中後の在宅生活の工夫～家庭でできるエクササイズ～】

■ **認知症研修会大好評**

8月23日日曜日に「認知症の方の理解とその対処法」について、第2宅老所よりあい所長 村瀬孝生氏の研修会を開催いたしました。参加者150人。涙と笑いの研修会でした。受講者の皆様からたくさんの感激のことばをアンケートで頂きました。是非、ホームページを覗いて見て下さい。

■ **川崎町開催の「地域福祉セミナー」のご案内**
NPO福祉用具ネットは企画に協力し後援しています。

第1回10月10日土曜日10時～12時
テーマ「健康づくり・からだづくり」
講師 西九州大学リハビリテーション学部 村田伸 教授
第2回11月14日土曜日14時～16時
テーマ「ぼけても大丈夫 地域でささえる取り組み」
宅老所 よりあいの実践から
講師 宅老所 よりあい代表 下村恵美子氏
第3回12月12日土曜日10時～12時
テーマ「いかに生きるか」～障がいに負けないで～
講師 佐賀大学医学部 松尾清美 准教授
参加費用：無料 会場：田川郡川崎町コミニュティセンター
事前申込は不要。詳しくは、ホームページをご覧下さい。

■ **今年も福智町高齢者の体力測定を実施**

8月から9月にかけて、約300人余りのふれあい交流参加の皆さんに実施しました。今年で4年目となります。

■ **平成21年度「福岡県立大学福祉用具研究会」報告**

福祉用具研究会は毎月20人以上の参加のもとで有意義な勉強ができています。8月にはオムツメーカーの方にご協力いただいてオムツの種類と正しい当て方について勉強しました。知っているようで知らないということを改めて認識しました。9月は困難事例の検討会を行いました。

■ **3月6日・7日にオムツフィッター3級研修開催！**
受講者の事前申込を受付ます。
この研修会は京都むつき庵との共催事業です。
募集人数： 20人
（先着順、NPO福祉用具ネット会員優先とします。）
受講費用： 20，000円予定
詳しくは事務局までお問合せ下さい。

■ **福祉住環境コーディネーター協会主催見学会情報**

福祉住環境コーディネーター協会からの委託事業として当NPOでは施設見学の企画をしています。

今後の施設見学の予定
・12月19日土曜日 「佐賀大学医学部附属地域医療科学教育研究センター」様（佐賀市）
・3月12日金曜日 「総合せき損センター」様（飯塚市）
参加費用は有料です。事前に福祉住環境コーディネーター協会への申込が必要です。詳しくは福祉住環境コーディネーター協会のホームページをご覧下さい。